

(研究ノート)

「アジア解放」か「アジア侵略」か

近代日本の言論人・政治家等のアジア観

井上圭典

序

- 一、 武力偏重の明治政府の成立事情
- 二、 対アジア観の諸相
- 三、 異国船の来航と政体改造論「新論」
- 四、 日清戦争への道
- 五、 三国干渉―国粹主義への加速
- 六、 列強への仲間入りの好機
- 七、 日露戦争勝利の結果……「黄禍論」台頭
- 八、 アジアは一つ

- 九、韓国併合への道
- 一〇、アジア蔑視の実態
 - 一一、「大東亜戦争」――住民の解放か、物資の獲得か
 - 一二、錯綜している大アジア主義
 - 一三、大義なき開戦
 - 一四、近代日本の政治はクーデターの歴史であるのか
 - 一五、現代の「志士」たち――戦争の火付け役
 - 一六、大東亜共栄圏とは
- 終わりに

序

一九九五年六月九日、衆議院本会議で「歴史を教訓に平和への決意を新たにする決議」が採択された。これは、連立政権の三党合意に従い一九九四年七月村山首相が所信表明演説において述べた「我が国の侵略行為や植民地支配の「深い反省」と「不戦の決意」を国会決議として実行に移したものである。

決議では「平和な国際社会を築いていかなければならない」としているが、そのためには近隣のアジア諸国との相互信頼関係が前提とされる。しかし、決議はその信頼・期待を裏切る内容のものになってしまった。

その後、戦後五十年目の八月十五日、首相談話で、「痛切な反省の意を表し、心からのおわびの気持ちを表明」し、全国戦没者追悼式の式辞で「不戦の決意のもと、世界の平和秩序を作り出す」と述べ、念願の「反省・謝罪・不戦」を内外に表明した。しかし、これらは談話であり、式辞であって、国会決議ではないから公約の完全実現ではなかった。

この公約実現を阻んだ理由は連立与党間の戦争観の相違である。

日本が行った戦争に関し、戦後の保守党内閣は、後世の歴史家の判断に任せるなどと曖昧な姿勢をとり続け、「大東亜戦争肯定論」の発言をする閣僚を解任・辞職・発言撤回などで押さえてきた。しかし、細川元首相の「侵略戦争」「侵略行為」の発言で、自民党、新進党などの「アジア解放戦争」論が再燃し、中でも細川発言に対抗し自民党では「大東亜戦争の総括」^①を出版し、戦争の正当性を展開している。

国会決議内容が「侵略戦争」から「侵略行為」さらには「侵略的行為」と後退する一方、各党の決議案は、「我が国の戦争が「十九世紀後半からの列強間の帝国主義的対立の中で、わが国は、軍国主義の台頭を許し」（社会党）、「列強が他国への侵略的行為や植民地支配を競い合った一時期、我が国もその渦中であって」（自民党）、「十九世紀後半から列強間の帝国主義的対立の中で、わが国でも軍国主義や超国家主義の風潮を許し」（さきがけ）、「十九世紀後半から列強は市場拡大を求めて植民地の獲得、拡大に走り、わが国も自存のためとはいえ、その潮流に乗った。」（新進党）などの戦争観に立つものであった。

少なくとも、政治を担い、天下国家を論議する論客とその同調者は、近代日本の戦争の原因を、十九世紀の帝国主義植民地争奪に求めることで一致している。この人たちは、「殴られた殴り返す」「殴られる側ではなく、殴る側に立つ」という戦前の国家の基本的なあり方・姿勢自体には疑問を持っていない。近い将来、国家が「殴られ」たら、こ

の人たちは直ちに「殴り返せ」と主張する可能性が大きい。

ともかく、戦争は国家が独占する暴力装置の発動によるものであるが、そのための軍備拡張、軍事訓練、戦争の大義名分の捏造、国民の志気昂揚、総動員体制などがその前段として準備されなければならない。これらは国民の合意をとりつければ実行できない。権力者は国民の中に戦争肯定、好戦思想を植え付け、厭戦・非戦・平和思想を摘み取ってゆく。

この小論においては、かつての戦争は日本の独立・自衛・アジア解放の戦争であったと主張する側の、いわば思想的先輩の言論を主としてとりあげた。それは以下に見るとおり、かつての戦争に関し、この先輩たちの言論は、極めて好戦的・侵略的で、アジア蔑視に満ちたものがあったことを明らかにするためである。

この人達の言論から、幾つかのキーワードを抽出し、これを分類整理し、それぞれのキーワード毎に章立てして論証する方法を採らず、時代的な流れを追って章立てをし、生の言論をそのまま引用することによって、文体・用語から行間にある「情念」まで読み取れるような方法を探った。

以下、論述の理解の一助になろうかと思われる一、二、三の予備的事項について説明を加えておく。

靖国推進派とは

日清戦争からアジア・太平洋戦争までの日本の戦争行為は侵略ではなく、独立・自衛・アジア解放にあったと主張するのが靖国推進派である。

靖国推進派は、その主張に従い以下のような政治活動を推進している。

- (1) 一九六九年自民党をして靖国神社法案を国会提出させる。
- (2) 同法案は、戦没者遺族への慰藉・自衛隊員の志気昂揚、「戦後政治の総決算」の突破口作りを策したものの結し、公式参拝、即位・大嘗祭の国家行事化の疑似「草の根」運動を展開した。
- (3) 同法案の「目的」条項作成過程で露呈した、戦没者を「英霊」としその「功績を讃え、その偉業を永遠に伝える」との戦争観を保持し続けている。
- (4) 同法案廃案を契機に「英霊にこたえる会」「日本を守る国民会議」という復古主義・国粹主義団体が「大同団結」し、公式参拝、即位・大嘗祭の国家行事化の疑似「草の根」運動を展開した。
- (5) この疑似「草の根」運動は、元号法制化、「戦没者を追悼し平和を祈念する日」閣議制定、政府の公式参拝見解の見直し・合憲化運動、一連の閣僚の侵略戦争否定発言支持運動、地方議会での戦没者追悼・感謝決議運動、国民の祝日「海の日」制定などを実現した。
- (6) 「不戦・謝罪」国会決議阻止目的の「終戦五十周年実行委員会」を結成、これに呼応する自民党の「終戦五十周年国会議員連盟」、新進党の「歴史を正しく伝える国会議員連盟」を作らせている。(前者は「明るい日本の会」議員連盟と改称して今も存続している。)

民族の危機と志士達とその末裔

幕末の日本では、志士と呼ばれる一群の人々が立ち上がった。これらは中下級の士族・郷土・浪人・神官・僧侶・学者・医師そして豪家の農商の子弟たちであった。日本を覆う「邪気・妖気」を打ち払い「正気」を回復するため、自らを「狂」の状態にして立ち向かったと言われる人々である。

日本近代の戦争を考える場合、「志士達の祖国日本への情熱と行動」の探求は欠かせない。この人達の敷いたレールの上を、軍部とその走狗の大陸浪人、自称国士・壮士などが突っ走り日本を戦争に巻き込み、日本を敗戦に導いたからである。

後程、幕末の尊皇攘夷派の志士達を奮立たせた一冊の書物を紹介したい。この書物は近代日本の戦争観・アジア観に今でも影響を与え続けている。

一、武力偏重の明治政府の成立事情

十九世紀の西欧諸国によるアジアの植民地支配の動きが、日本をして近代統一国家への選択、明治維新運動に向かわせたとの説は定説となっている。しかし、「神武創業の昔に返る」王政復古を柱とする明治政府がベストの選択であったかどうか、問われなければならない。外庄に屈して日本が植民地になるか、独立するかを選択を問われれば、後者を選ぶのが当然で、明治政府はその独立維持を果たしたとの論が靖国推進派の主張であるが、これが独立への唯一の選択、体制選択であったかとの疑問は残る。

特に、二十世紀前半の日本の戦争の歴史は、過度に尚武の精神を強調して登場した明治政府の体制、靖国推進派のいう「国体」からくる覇権・膨張政策によるものと断せざるを得ない。

初期の明治政府を薩長体制などともいう。薩摩藩島津家の祖は源頼朝の庶子である。長州藩毛利家の祖は鎌倉幕府の基礎を固めた大江広元である。おまけに、この薩長両藩の武力を背景に王政復古を成功させた岩倉具視の祖は村上

源氏である。武に偏り過ぎた政府の成立理由を探し求める場合、この辺も考慮すべきことであるのかも知れない。⁽²⁾

また、明治政府はその権力の由来の正統性を、日本の国体に求めている。この国体とは、天皇が日本の人民と国土の所有権・支配権をもち、その支配権をその時々々の権力者に委ねているとの国の基本的なあり方をいう。これは万古不易で、天皇は万世一系の主張である。そして、明治政府こそその支配権力を委ねられたとの、自己主張・弁護である。

キリスト者は、人間・土地の所有権・支配権が天皇に属するのとらえ方はしないし、そもそも天皇という……彼らの云う神的存在、「天皇霊」を内に持つ、人間の姿をしているが人間でない現人神というようなもの存在を認めることができない。

二、対アジア観の諸相

近代の日本人の対アジア観をほぼ時代を追って並べると次のようになる。⁽³⁾

- (1) 朝鮮民族への支配者意識、中国民族への軽蔑に傾斜した対抗意識、インド・フィリピン・東南アジア諸民族に対する憐憫を交えた同情意識
- (2) アジアへの覇権思想（アジア侵略思想）
- (3) 大アジア主義思想（対西欧の広域連帯思想）
- (4) 脱アジア思想、脱亜入欧、「名誉白人」

- (5) 皇道主義・国学思想
- (6) 東亜新秩序 東亜共同体論、東亜連盟論、五族協和論
- (7) 選民意識（アジア蔑視） 「東洋の盟主」
- (8) 大東亜新秩序 大東亜共同圏、大東亜共同宣言、自民族中心の階層秩序

これらは、日本が西欧と手を結ぶか、アジアと手を結ぶかで大別できる。すなわち

(日本 + 西欧) → (アジア) 脱亜入欧
 (日本 + アジア) → (西欧) アジア主義

の二つのベクトルが、国民の間に現れている。時の権力が、これらを巧みに操り戦争を遂行してきた。

靖国推進派はアジア主義の側面だけを強調し、アジア解放戦争論を展開する。しかし、歴代の日本政府がとった対アジア政策は「東洋の盟主・日本」であった。

三、異国船の来航と政体改造論「新論」

幕末志士のバイブル 一八二五年刊行

十八世紀末日本沿岸海域への外国の商船・捕鯨船等の来航は、国防論議を盛んにしたが、水戸藩の学者会沢正志斎はその著書「新論」で、幕府を改造して国防に力を注ぐ体制を築き上げることの緊急事を論じた。原文は漢文体であるが、その書き出しの口語訳は次のようになる。⁴⁾

「謹んで考えるのに、わが神国日本は、世界の東方に位置を占め、正に朗らかな太陽の差し昇るところであり、また天地精気の発生地でもある。天祖（アマテラス・オミカミ）の御裔が、天津日嗣（アマツヒツギ）の御位におられて、永久に易（カワ）らない有様は、全く他国に類を見ない優越点である。支那などでは、とかく、易姓革命ということが行われ、永く一姓を以て、帝位を持続した例がない。西洋諸国とても大体、同様だ。こうした点から見ると、日本の天子は、誠に地球上に於ける国の元首だと云ってよく、日本の天皇政治は、正にすべての国家を統治してゆく根本的な原則だと云ってよろしかろう。従ってその御稜威（ミイツ）は、世界に輝き渡り、陛下の恩澤（オンタク）は遠近の差別なく、東西に及びべき筈のものだ。

ところが、今日、西洋の蛮人らは身体の上から云えば脛足にひとしい、賤（イヤ）しい身分でありながら、蒸気船、軍艦などに乗って、世界を駆け回り、諸国を侵略して、手をアジア方面まで伸ばすばかりか、せいぜい、すがめ、びっこ程度の分際でありながら、我が尊い国柄を凌ぎ、辱かじめようとするのは、真に潜上至極だと云わねばならぬ。云々」

強烈な天皇中心主義と、いわれない極端な外国人蔑視の心情は、現代ではついてゆけないと思われそうであるが、驚くべきことに敗戦直前までこの主義・心情は殆ど変わらずに日本人のものであったし、今に至るも靖国推進派には大なり小なりこの主義と心情が分有されている。

「新論」をもう少し見てゆく。

(一)「新論」のいつ平和

「帝王の地位にあるものが恃^{たも}みとするところは、唯すっかり天下を保って、久しく平和を続け、治政を続け、世の中が動揺しないで、すべてを畏れ服せしめる上のみにあるわけではない。無論、そうしたことも必要だが、更にその上、万民が心を一つにして、帝王に仕え、心から敬愛の情を捧げつつ、容易に離反せぬという一事こそは、最も恃むに足るべき重点だと思つ。」(国体 上)

靖国推進派の天皇へのこだわりは、このような国体論による。

(二)その戦時体制作り

「自分をつくづくと現代の世を見渡して、改新しなければならぬ……その第一はまずわが国が諸侯の内政を整理することで、これに対して次の諸点に注目する必要がある。わが国固有の武士道精神を發揮すること、武士・町人を問わず分に過ぎた生活を禁ずること、天下一般の人々を生活難から救済すること、才能あり、政治的手段に豊かな人々を採用して積極的に政策を施行させること。……」(守禦)

この政策論は明治維新の「富国強兵」「四民平等」「万機公論」政策を彷彿とさせる。

(三)その戦術・戦略論

「……志を広く大きく持ち、天下の大勢を観察して、敵に対しては、一切のその謀計を破り、要処・空隙を突き

味方同志互いに戒め合つて守備を十分にしてい、兵力で異国人を退けると同時に、善政・教戒で我に帰服させる手段を採るのが理想的だと思つ。敵が近海を荒らしたならば、奮戦してこれを全滅し、世界に誉れを挙げ、帰順すれば、周囲から四方の極地に至るまで皇化を及ぼし、北海道・千島辺から樺太・シベリア方面までも続々征服して、日々異国人を一人でも多く服従させて国土を拡大する。……」(長計)(=遠大な計画)

日本の後々の領土拡張主義政策が、すでに鎖国時代に練られていたのである。

(四)その排外思想

「……しかし、彼らが無根拠な西洋人の説を受け容れ無批判的に諸方にこれを宣伝し、如何に説いても馬耳東風と聞き流して、結果に於いて、その侵略計画を助長して止まないようなもの共は我々としても徒らに温情主義を採つてはられない。断然として厳禁させ、違反者は内乱罪の極刑に処し、異国から輸入された貨物・薬品・毛織物など必ず焚き捨て、破り棄て、天下の人々に犬や羊のように異国人を賤しめさせ、人間を害する悪獣と同一視して、出合い次第、一掃すべき必要がある。」

一八二五年に徳川幕府は異国船打払令を出す、この年に「新論」が刊行されている。

(五)その徹底した反キリスト教

キリスト教の布教は国民意識の統一を乱すものとみなし、平和の敵、戦争に訴えても排除すべきとの論が、「新論」

の到るところ見られる。日本人の戦争と平和を論ずる場合に欠かすことのできない論点である。

「西洋の夷どもになると、いずれもキリスト教を奉じていて、それを侵略の具とし、各国を奪うのだ。表面では神の福音を説くが、その実際に目指すところは、各国を盗み取ることにある。従って到るところ、神社を焼き払い、巧みに人民を欺き、そうした後、国家を亡ぼすのだ。すなわち彼ら邪宗門の徒は他国を臣従せしめねばやまない。」

こうした侵略心が盛んになった結果はルソン、ジャワなどを奪ったと同様の振る舞いを神国日本の上にも演出しようとしている。……今や西夷は、日本を奪い取ろうとする悪心を抱いて、北海・千島群島などを窺い、加うるに、キリスト教宣伝の風潮が人々を惑わし、害に害を重ねて、百出極まりないなきように思ふ。」(国体 上)

「あるものは、アンゲリアの信奉する宗旨は、イスパニアと異なるという。けれどもキリスト教中の別派だというに留まり、大きな差はないが、キリスト教を利用して、正義の仮面をつけ、各国を侵略するという上では、皆同じだ。」(形勢)

「西洋人はそれ程優れた人種では決してない。腕前を振るう根拠となるのは、ただキリスト教だけで、実にその宣伝を唯一の手段として侵略を実行するのである。……ありもしない事に何とか理屈をつけ、まわりくどい、不思議な方法で論を進め、世人の耳を汚すのだ……今西洋人が或国を亡ぼそうとする。先ず通商の許可を請うた上で国内の事情、国防の程度を窺い、大丈夫と思つたら、すぐに大兵を挙げて突進・攻撃してその国を奪い、意外に隙なく一挙に攻め落とされないと知れば、邪教を国中に流行させて、国人の心を邪道に誘い、邪教への帰依を歓迎し、一人でも多数の信者を得ようと狂奔する。」(虜情)

「新論」以後一貫して日本の政治思想は「教化」を最重要視する。「教化」の最大の敵はキリスト教である。キリスト教側から見れば、この「教化」政策が最大の敵であり続けている。

反キリスト教の思潮は現代でも生きている。例えば次の文章など、「新論」の思想そのものといえる。

総山孝雄「西欧のアジア侵略と大東亜戦争の意義」(一九九四・七・一九講演)⁶⁾

「……それがあの徳川時代の前の戦国時代の終わり頃に、日本にも迫ってきましたが、幸いにもその害毒に気がついた徳川幕府が、キリシタンを禁制にして、日本を鎖国にしました。このことが戦後は非常に悪い宗教弾圧のようになら、島原の乱で戦ったキリスト教徒の反乱を大変な美拳のように言い換えられましたけれども、もしこの時に徳川幕府がキリスト教を禁止して鎖国をしなかつたら、日本はもつとくに西欧の植民地になっていたかも知れませんが。キリスト教の洗脳力というものは非常なものでありまして、島原の乱の指導者であった天草四郎の伝記なんか読みますと、とつてい彼はまともな人間ではないですね。恐ろしく狂信的な若者で、まだ歳も若いのに魔力的な指導をしました。キリスト教の洗脳力というのが、いかに恐ろしいかがこれで分かると思います。そういう意味で徳川幕府が、このキリシタンを禁止して日本を守ってくれたということに、われわれは大いに感謝をしなければならぬと思います。……」

(六)「新論」を含めた国学の底流

「新論」は国学の伝統から生まれたもので、すべて会沢正志斎の独創によるものではない。国学は外来思想……儒教・仏教……が導入され広まっていくと必ず頭をもたげてくる「拒絶反応」、一種の国粹運動の表現形態である。その

典拠は古事記・日本書紀であって、その編纂目的が天皇統治の正統性を明らかにするものであるというのが通説である。そこで記・紀からは天皇による世界支配が大義名分として引き出されるのは当然である。

以下の言論は「新論」の影響とともに、この国学の伝統が底流にある。

(a) 吉田松陰「幽囚録」

「朝鮮と満州とは相連りて神州の西北に在り、亦皆海を隔てて近きものなり。而して朝鮮の如きは古時代我れに臣属せしも、今は則ちややおこる、最も其の風致を詳かにして之れを復さざるべからざるなり」、「朝鮮を賣めて質を納れ貢ぎを奉ること古の盛時の如くならしめ、北は満州の地を割き、南は台湾・呂宋の諸島を収め、漸に進取の勢を示すべし」。

(b) 同 久坂玄瑞宛の書簡（現代語に直す）

「幕府はすでに外夷と和親条約を結んでいり。これを日本人が破ったたら、信義にそむくことになる。だから、現在の策としては、条約を立派に守って、その限界で外夷をくいとめておき、その間に乘じて蝦夷をひらき、琉球を収め、朝鮮を取り、満州を拉し、支那を圧え、印度に臨み、以て進取の勢いを張り……神功皇后や豊臣秀吉が果たさなかつたことを果たすことができる。」

(c) 佐藤信淵「宇内混同秘策」一八三三年

「他邦を経略するの法は弱くして取り易き処より始むるを道とす。今に当て、世界万国の中に於いて皇国よりし

て攻め取り易き土地は、支那の満州より取り易きは無し。……（日本の南方には敵国は少ないから北方に意を用い、南方ではフィリピン諸島を開発して）皇国の郡県と為し、其の地の産物を採り集て本邦に輸し、以て国家の入用に供すべし。」

(d) 明治天皇「秀吉復活に関する御沙汰書」一八六八年

（現代語に直す）「秀吉は日本の国家を統一した偉人である。それなのに源（徳川）家康が出てきてこの家をひっくり返してしまった。……秀吉のやったことは、日本の武威を海外に轟かせた。だから朕は、今後秀吉のような臣下が輩出することを望む。……」

(7) 岩波文庫「新論・迪彝篇」の解説（尾藤正英）一九三二年

「本書が最初に出版されたのは、安政四（一八五七年）年のことであるが、やがて『斯く矯激なる新論は甚しく当時の人心を鼓舞し、各藩の志士、争ひて之を読み、重刻・覆刻、板を重ねること幾種なるを知らず、仮名交り文に訳したるさへ出づるに至りては、流伝の勢、驚くに堪へたり』（『徳川慶喜公伝』巻一）と伝えられる状況が現出した。とくに吉田松陰・平野国臣・真木和泉ら、尊攘運動の有力な志士に本書が愛読され、つよい感銘を与えたこと、幕末の諸藩において本書が藩校の教科書として使用された事例のあるのが注目される。明治維新以降においても、本書は単行、もしくは各種の叢書に収められた形で、しばしば刊行され、国家主義思想の經典の一つとなったが、そればかりでなく、本書の中で唱えられた『国体』思想や『祭政一致』論は、明治政府による神道国教化政策の実施や教育勅語の公布を通して、現実政治の上に具体化されていったのである。」（P.297）

四、日清戦争への道

幕末の尊皇攘夷を唱えた志士達は等しく征韓論者でもあった。明治政府も成立当初から征韓論が大きな外交課題であった。当時、清国は朝鮮の宗主国であった関係上、日本が朝鮮の支配権を得るためには清国から宗主権を奪わなければならなかった。この政策に与野党・言論界・国民に大賛成であった。

戦争のきっかけは、朝鮮国内の内乱（東学党の蜂起）鎮圧という名目の出兵であった。東学とは西学（キリスト教、儒教）に反対してできた民間宗教である。

(1) 木戸孝允の岩倉具視への建言

「すみやかに天下の方向を一定し、使節を朝鮮につかわし、彼の無礼を問い、彼もし服せざるときは、罪を鳴らしてその土を攻撃し、大いに神州の威を伸張せんことを願う。」

(2) 福沢諭吉 一八八一年

「今西洋諸国が威勢を以て東洋に迫る其有様は火の蔓延するものに異ならず。然るに東洋諸国殊に我が近隣なる支那朝鮮等の遅鈍にして其勢に当たること能はざるは、木造板屋の火に堪えざるものに等。故に我日本の武力を以て之に応援するは、単に他の為に非ずして自から為にするものと知るべし。武以て之を保護し、文以て之を誘導し、速に我例に倣て近時の文明に入らしめざるべからず。或は止むを得ざる場合に於いては、力を以て其進歩を脅迫するも可なり。」

(3) 福沢諭吉 一八八二年（時事新報社説）

「（洋行の途中の体験）……印度支那の人民が斯く英人にくるしめらるるは苦しきことならんが、英人が威権をほしいままにするのは又甚だ愉快なることならんとて、一方を羨み、吾も日本人なり、何れの時か一度は日本の国威を輝かして、印度支那の土人等を御すること英人に倣うのみならず、その英人をもくるしめて東洋の権柄を我一手に握らんものをと、壮年血気の時節、ひそかに心に約して今尚忘るること能はず……」

「我々日本人は仮令ひ平和を祈るも、国権を枉げて敵（清国）を避る程の卑屈に沈むこと能はず。……世界中に我日本の体面を失ふて支那の妄慢を逞ふせしめんよりも、寧ろ彼の所望に応じて戦いを開き、東洋の老朽木を一撃の下に挫折せんのみ」

(4) 福沢諭吉の「脱亜入欧」一八八五年

「わが日本の国はアジアの東辺に在りといえども、其の国民の精神はすでにアジアの固陋を脱して、西洋の文明に移りたり。しかるにここに不幸なるは近隣に国あり、一を支那といひ、一を朝鮮といふ。……この二国の者どもは一身につきまた一国に關して改進の道を知らず、交通至便の世の中に文明の事物を聞く見せざるにあらざれども、耳目の聞見はもつて心を動かすに足らずして、その古風旧慣に恋恋するの情は百千年に異ならず。……」

「されば今日の謀をなすに、わが国は隣国の開明を待つて共にアジアを興すの猶予あるべからず、むしろその伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人がこれに接するの風に従つて処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免かるべからず。われは心においてアジア東方の悪友を謝絶するものなり。」

(5)内村鑑三の「日清戦争義戦論」国民の友 第三四号 一八九四年九月三日

「吾人は信ず、日清戦争は吾人に取りて実に義戦なりと。其義たる法律的にのみ義たるに非らず、倫理的に亦然り。」

「今回の衝突たるや、吾人のみずから好みて来せしものならざるは、わが邦近来の状況を知る者の充分に承認するところなるべし。……もし利欲にして吾人の最大目的たらんか。戦争は吾人の最も避くべきもの、非戦こそ、吾人の最終開始の政略たるべきなり。しかるに、過ぐる十余年間、シナの吾人に対するや、その妄状無礼、ほとんど吾人の忍ぶべからざるあり。大西郷すでにここに見るところあり。即時にその罪を問わんと欲する彼の熱血的希望は実に彼の生命を捨てしむるに至り、わが邦もこれがために悲惨な内乱の害に会えり。吾人は実に吾人の血肉を殺して隣邦との衝突を避けんとせり」

「しかるに明治十五年以後、シナのわが邦に対する行為はいかなりしや。朝鮮において常にその内治に干渉し、われのこれに対する平和的政略を妨害し、対面的に吾人に陵辱を加えてやまざりき。……」

吾人、外交歴史を閲するに、いまだかつてかくのごとき卑劣政略に接せしことなし。これ残酷なる娼家の主人が、その詭計の中にある、扶助なき可憐の少女に対して常に執行する政略なり……これ自由を愛し人権を尊重する者の一旦も忍び得べきところにあらず。吾人は怪しめり、この積悪に対して非難の声をあげるものは吾人日本人にとどまりしことを」

「吾人は朝鮮戦争をもって善戦なりと論定せり。その、しかるは、戦争局を結びて後に最も明白となるべし。吾人は貧困せまりし吾人の隣邦の味方となりたり。その物質的に吾人を利するところなきはもちろんなり。またシナといえども、壊滅は吾人の目的にあらず。彼らをして吾人流血の価値をあがなわしむれば足れり。吾人の目的は達せしむるべし。」

はシナを警醒するにあり。その天職を知らしむるにあり。彼をして吾人と協力して東洋の改革に従事せしむるにあり。吾人は永久の平和を目的として戦つものなり。天よ、この義戦に倒るるわが同胞の士をあわれめよ。」

「吾人はアジアの救主として、この戦線に臨む者なり。吾人はすでに半ば朝鮮を救えり。これより満州、シナを救い、南の方、安南、シヤムに及び、ついにインドの聖地をして欧人の羈絆より脱せしめ、もって初めて吾人の目的は達せしむるべし。」

(6)尾崎行雄 支那処分案 一八九四年

「余は実に支那人を棄るに忍びず。故に帝国をして、天に代て、其地を領し、其民を治め、文明の光輝を四百余州に横被せしめんと欲するのみ」

(7)福沢諭吉 私信 一八九五年一月一七日付

「実に今度の師（日清戦争）は空前の一大快挙、人間寿命あればこそ此活劇を見聞候義（ママ）。……何ぞ料らん唯今眼前に此盛事を見て、今や隣国の支那朝鮮も我文明の中に包羅せんとす。畢生の愉快、実以て望外の仕合に存候」

(8)雲照（高野山）一八二七 一九〇九年『不殺生戒法の軍事に対する観念』⁶

「仏教は素より大慈大悲の精神なれば、其眼中悪むべく殺すべき一衆生だをも見ず。而して菩薩の大慈大悲は其罪を悪んで其人を悪まず。故に彼悪人をして恣に悪業を造らしめて、来世に無間地獄に墮するを傍観するに忍び

す。寧ろ速やかに彼を殺し、地獄の業を止めて作らざらしめ、然る後に再び人間界に現出せしめんことを欲す。又之と同時に他の一切衆生の苦患を除きて、日土を利益し、平和安樂の域に住せしめんことを欲す」

五、三国干渉 国粹主義への加速

日清戦争は日本の勝利に終わったが、外交的には三国干渉を認めるという失敗、国内的には熱狂的な日本主義を生みだし、アジア諸国に日本のアジア侵略警戒観を抱かせる結果となった。戦勝国が領土を奪えるのであれば、三国（独仏露）が日本と戦い勝利し領土を奪い返せる。これが国際条約のない時代の論理であった。内村鑑三は非戦論を説くも少数派に留まる。

(1) 徳富蘇峰 『蘇峰自伝』 一九三五年

「遼東還付といふことは、予の身も魂もほとんど喰いつくし、焼きつくすほどであった。予は十年の後にせよ、二十年の後にせよ、はた百年の後にせよ、この屈辱は必ずそそがねばならぬと決心した。」

(2) 高山樗牛 『日本主義』 一八九七年

「日本主義は今日我らの創造したるものにあらずして、国民が三十年の歴史的検証に本^まける確実なる自覚心の最も明瞭なる発表に外ならざるなり。その由来するところ深く国民の特性に根拠し、遠く建^{つく}国の精神に淵源し、牢

として抜くべからず。……日本主義は大和民族の抱負及理想を表白せるものなり。日本主義は日本国民の安心立命を指定せるものなり。」

(3) 高山樗牛 『帝国主義と植民』 一八九九年

「凡そ其の領土及び植民地の膨張と帝国主義の励行と相伴はざる国家は、必ず衰亡……吾人は将来、益々其の隆盛を見るべき海外植民地に対しても、我邦人が其アングロ・サクソンの帝国主義を遵奉して、敢えて違はざらむことを希望せざるべからず。」

六、列強への仲間入りの好機

「身に寸鉄をおびず、義和拳を習得することで西洋銃に對抗できる」と信じて結集した宗教集団が義和団である。一九〇年にはほとんど全中国に広まるほどの大規模な反帝国主義運動を展開した。「扶清滅洋」（清朝をたすけ西洋を滅ぼす）を標榜する中国民族運動の鎮圧戦争に欧米列強の仲間として、日本が「洋」の一部として軍事行動を起こしたのである。

日本軍はもつとも勇敢に戦い列強の仲間に入り、日本軍はそのまま中国に駐留し、やがてロシアと満州への覇権をめくり対立を深めてゆくのである。

(1) 義和団事件…北清事変

イギリス植民相チエンバレンの駐英公使加藤高明への忠告 1898年（明治三一年）⁹⁾

「もし北清地方（満州）がロシアの手にいれば、結局清国分割がなされるに至るであろう。すなわち、ドイツは山東付近を、フランスは南部を、イギリスは中部を占めるだろう。このいつ時に貴国はどこを取ろうとするのか。貴国の手のつけられる分け前はどこにも見出せないではないか。」

桂太郎陸相 『自伝』

「列国の同盟（対義和団）に加わらざるべからず。……将来東洋の覇権を掌握すべき端緒……彼（イギリス）をして援助を乞わしめる時が初めて頭をもたげる時だ……（帝国主義列強加入のため）列国に保険料を支払わんがための派遣であった。」

桂陸相の福島少将への訓令

「子（福島）は列国に保険料を支払はんが為に赴くなり、宜しく往きて戦死すべし、子が小技隊を率いて敗戦するとも、将来日本に対して偉大の功たるを失はざるべし。」

大山参謀総長 山本海相意見書

「働きにおいて主動者……報酬においても亦最も貴いものを得なければならぬ。」

山県内閣 臨時覇権隊編成要領書

「もし貴国（イギリス）が同意するならば、大軍を救援に送る用意がある。」

閣議決定 一九〇〇年七月六日

「今や列国の援兵未だ致らず、天津大沽の軍隊に苦しむ時に方て急に大兵を以て之に赴かば、以て彼の地の重困

を解き進て北京の乱を平べくることを得べく、撥乱の功概ね我に歸し而して各国は永く我を徳とせん。」

(2) 内村鑑三の非戦論…「万朝報」論説

「戦争廃止論」一九〇三年六月三〇日

「その目的（日清戦争の）たりし朝鮮の独立は之がために強められずして却て弱められ、支那分割の端緒は開かれ、日本国民の分担は非常に増加され、その道徳は非常に墮落し、東洋全体を危殆の地位にまで持ち来つたではない乎」

「衝突の真義」一九〇三年九月二四日

「名は日露の衝突であれ、実は西国の帝国主義者の衝突である。さうしてこの衝突のため最も多く迷惑を感じる者は、平和を追求してやまざる西国の良民である。」

「危険の伏在」一九〇三年九月二六日

「日本国の存在を危くするものは、ロシアの満州占領に限らない、二十世紀の今日にあたって、支那風の忠孝道徳を国民に強ひるが如き、そのことそれ自身が日本国の存在を最も危くするものである。」

「容易なる開戦論」一九〇三年九月二七日

「忠君といひ愛国といへば、必ず外国と戦ふことのやうに教えられ来た日の日本人に向かって、開戦をすすめるはごたやすうことはない。」

(3) 新聞界、財界の主戦論

時局問題東西連合新聞記者大演説会 一九〇三年一〇月二二—二三日

「姑息なる外交手段や屈辱的条件による無意義の平和的解決は日本国民の潔しとせざる所」

渋沢栄一「露国と戦つべし」一〇月二八日

近藤廉平「一日後れば一日不利である」同日

三井理事高橋義雄「露国が満州に行ふ所は、日本も亦之を朝鮮に行はざるべからず、露国が満州を占領すれば、日本も亦武装すべし。」一〇月二五日

森村市左衛門「時局遷延の害は戦争の害に過ぐ」一一月七日

東洋経済新報「戦後は市場の好況を呈すべし、屈辱的なる平和は商況を振作する方法にあらず。」一一月二二日

七、日露戦争勝利の結果 「黄禍論」台頭

英国はロシアの南下を押さえる「藩屏」として日本軍事力に期待をかけていた。しかし、大国ロシアの敗北は、欧米諸国の対日観を転換させた。対日警戒論が新しい「黄禍」論として台頭した。欧米流の戦争のルールを無視する日本に警戒を始めたのは無理からぬことである。

(1) 「太平洋戦争への道」第一巻 朝日新聞社

「日米関係は日露戦争を境に一変した。すでに一九〇五年（明治三八年）八月二九日、ルーズベルトの書簡は、『余は従来日本びいきであったが、講和会議（ポーツマツ）開催以来、日本びいきでなくなった』と書いている。」

(2) 徳富芦花「勝利の悲哀」

「一方において白哲人の嫉妬、猜疑少なくとも不安は黒雲のごとく爾をめぐってわき起り……一方においては、他の有色人種が凱旋ラッパの声にあたかも電気をかけられたることく、勃々と頭をもたげ越こし来れるにあらずや。この両間に立って、爾は如何にして何をなさんと欲するか、一歩誤らば、爾が戦勝はすなわち亡国のはじめとならん、しかして世界未曾有の人種的大戦乱のもととならん。」

(3) 徳富芦花「黄人の重荷」

「然も自ら求めざるも、世界の二大人種の一なる、黄色人種は、何れも我が大和民族を仰がざるものなし……何れも大和民族を以て、其の希望を繫ぐ標的となしつつかあるが如し。」

(4) 朝河貫一『日本の禍機』一九〇九年

「（日本の膨張主義の台頭は）世に孤立する私曲の国、文明の敵（として）（世界憎悪の府）となることを警告し）しからざるまでも、日本が行く行くは必ず韓国を併せ、南満州を呑み、清帝国の運命を支配し、かつ手を伸べて印度を動かし、火律賓および豪州を嚇かし、兼ねてあまねく東洋を威服せんと志せるものなりと信ずるもの比々（次第に）然らざるはなきものなり」といふ。

八、アジアは一つ

日露戦争後、中国革命志士と連携をもった「大陸浪人」は日本支配層の別働隊に取り込まれる。この浪人達は岡倉天心の「アジアは一つ」に大アジア主義の理論的根拠をえている。アジアが一つとなって西欧に対抗するという主張は国民の中にも同感を得、日本の東洋制覇の動きを肯定した。

(1) 岡倉天心「東邦の理想」一九〇一年

序章

「アジアは一つである。ヒマラヤ山脈は、二つの強大な文明、すなわち、孔子の共同社会主義をもつ中国文明とウエーダの個人主義をもつインド文明とを、両者をただ強調する為のものとなって、相分っている。しかし、この雪をいただく障壁さえも、究極・普遍的なるものを求める愛の広いひろがりをも、一瞬たりとも断ちぎることはできないのである。」

終章

「しかし今日は、大量の西洋思想が、われわれを混乱させている。われわれの言い方をすれば、大和の鏡は曇らされている。維新とともに、日本はたしかに、その過去に立ち返り、そこにこの国が必要とする新しい活力を求めている。」

(2) 岡倉天心「東洋の覚醒」一九〇一年執筆、一九三四年公刊

「アジアの兄弟姉妹たちよ、大いなる苦悩が、われわれの父祖の地に横たわっている。東洋は衰退の同義語となった。その生民とは奴隷の渾名である。」

「アジアはゲリラ戦によって外国の覇権をうち破り、かくて市民と兵士とを自覚しめて、祖国の救済のために統一せしめるためには、山にも川にもことを欠くところはないのである。したがって、かれらヨーロッパ人が、われわれの大地を握っている基礎は、必然、飼い馴らした土民軍に依存するのである。だがしかし、これらの軍隊は、われわれのものではないか。」

九、韓国併合への道

戦後五十年、韓国では旧朝鮮総督府の建物の解体作業を開始し、国会議員の中に韓国併合条約（一九一〇年）無効運動が始まった。それほど、強引な併合であった。

(1) 島田三郎（改進黨）の演説 一八九三年

「凡そかくの如く学問もなければ、勇気もなく、愛国心もなく、而して身体が強くて従順であるという国は、何が適当かというに属国になるよりほかに仕方がない。実に属国には適当なくである。」

(2) 岡倉天心「日本の覚醒」一九〇四年

「何処かの敵対者が、この半島（朝鮮）を占領した暁には、日本へ軍隊を送るのは容易である。なぜなら朝鮮は、いつも笑っている懐剣のごとく、日本の胸にむかって横たわっているからである。そのうえ、朝鮮と満州の独立は、経済上からも、わが人種保全に必要なのである。なぜなら、つねに増加しつつあるわが人口には、これらの国々の耕作希少な土地において、もし合法的なはけ口が奪われるなら、そこには飢餓が待っているからである。」

(3) 新渡戸稲造 一九〇五年六月

「……韓国処分の問題は吾人の注意を惹かずんば非ず。政治的本能を欠き、経済的常識に乏しく、知識的野心無き、彼の薄弱なる女性的国民……。」

(4) 中村 繁「大東亜戦争はなぜ起こったのか」（一九九三年一〇月一九日講演）^⑧

「……日本の戦争責任ということがよくいわれますが、弱い国というものは弱いことによって歴史に対する責任が出てくると思う。国が弱いことによって、やはり歴史に対して非常に大きな責任が生ずる場合がある。これが当時の清国であり朝鮮だったと思うのであります。……私は、はつきり申しますが、これは朝鮮や中国の責任も十分にある。弱いということによってロシアの侵略を招いた。それがその後の波瀾を招いたということは、歴史に対する責任というものだろうと思うのであります。……」

一〇、アジア蔑視の実態

近代日本では台湾人を「本島人」、生蕃、韓国人を「半島人」、鮮人、東南アジア、南洋群島の人々を「土人」、原住民、「島民」と呼び分け、蔑視教育をした。

(1) 「高等小学読本」 （日露戦争直後刊行）シンガポール印象記

「上陸すれば、色黒き土人争い集りて、予が手荷物を取り、辻馬車に持ち運ぶ、其の喧しき事喧嘩の始りしが如く……異様の服を着けたる土人は猛悪なる黒色の顔に笑を含みて、鬼の如くあり、羅漢の如くあり。」

(2) 「尋常小学国語読本第三期」「トラック島便り」

「土人はまだよく開けていませんが、性質はおとなしく、我々にもよくなつき、殊に近年我が国で学校をそこに立てたので子供等はなかなか上手に日本語を話します。」

一一、「大東亜戦争」 住民の解放か、物資の獲得か

一九四三年から南方戦線を維持出来なくなった日本政府は、フィリピン、ビルマ、インドネシアの「独立」を宣撫目的で認めるが、日本軍の駐屯、大幅な権限の保留が条件であった。靖国推進派の言うような、アジア解放のために尊い血を流したわけではなかった。武力で欧米勢力を一時駆逐したのは解放のためではなかった。占領地に軍政を

敷き、解放運動を武力で押さえるという、宗主国の交代を狙ったものである。

(1) 日本政府の「南方占領地行政実施要領」

「占領地に対しては差し当たり軍政を実施し、治安の恢復、重要国防資源の急速獲得及び作戦軍の自活確保に資す……国防資源取得と占領軍の現地自活の為、民生に及ぼさざるを得ざる重圧は之を忍ばしめ……宣撫上の要求は右目的に反せざる限度に止むるものとす……皇軍に対する信倚観念を助長せしむる如く指導し、其の独立運動は過早に誘発せしむることを避くるものとす……」。

(2) 「基本国策要綱」閣議決定 一九四〇年七月 東亜新秩序 大東亜新秩序

「皇国の国是は八紘を一字とする肇国の大精神に基き世界平和の確立を招来することをもって根本とし先づ皇国を核心とし、日滿支の強固なる結合を根幹とする大東亜の新秩序を建設するに在り」

中村 繁 「日米交渉の経緯と大東亜戦争の意義」(一九九三年一月二六日講演)⁹⁾

「……そして、日本はその結果、南方に出ていって確かに南方を支配しました。しかし、その支配した結果、東南アジアはことごとく独立した。でありますから、もしあのときに日本がアメリカと戦争しなければ、おそらくその後の東南アジアの独立もなかったでありますよ。」

ですから、我々が東南アジアの人々に聞いたことは、日本によって戦争の被害を受けたと言っただけでも、じゃ、戦争の被害がそんなに恨めしいのならば、あの戦争がなかったほうがよかったのか。しかし、あの戦争がなかったとすれば、徳川時代の初めからの三百年の西洋の植民地支配、あの奴隷の平和というものが継続したままでは

なかったのか。あの白人による植民地支配が継続すると、戦争による犠牲があっても独立したのと一体どちらがよかったんだ、こういうことを我々は東南アジアの人々に聞き返したいのでございます。……」

一一二、錯綜している大アジア主義⁽¹⁰⁾

「大アジア主義と『アジアの連帯』の中味は、

(1) 侵略に反対する人民の闘いを純粹に支援する立場(孫文、宮崎滔天)、

(2) 国益を踏まえたアジアの安定をはかる立場(犬養毅)、

(3) そして将来の日本の侵略を容易にするための『下地づくり』(頭山滿、川上操六)の三つの要素を包含していた。

重要なことは、『連帯』と『侵略』のように、相容れない思想が、『連帯』(大東亜解放)の名で、ある歴史状況下では一定期間存続し得たことである。」

一一三、大義なき開戦

靖国推進派は、先のアジア・太平洋戦争を東亜解放の戦争であった主張するが、その根拠として開戦の詔勅とか、

(戦時下) 政府の公式発表に求めている。しかし、戦争の大義のないままの開戦であったことを毎日新聞は報じている。

毎日新聞 一九九五年八月五日

開戦を六日後にひかえた一九四一年二月二日

昭和天皇(開戦の)大義名分はいかに考うるや

東条首相「目下研究中にありまして、いずれ奏上致します」

この、「いずれ」が約二年後になり外務省に「戦争目的研究会」が設置され、「大東亜共同宣言」で戦争の大義が一九四三年八月に出される。その宣言要旨は

「一、道義に基づく共存共栄の秩序 一、自主独立を尊重し大東亜の親和を確立 一、相互の伝統を尊重し大東亜の文化を高揚 一、互恵の下、緊密に提携し、大東亜の繁栄を増進 一、人種差別を撤廃し、資源を解放し世界の進運に貢献」である。

一四、近代日本の政治はクーデターの歴史であるのか

明治維新は一種のクーデターから始まったと主張する学者が存在し続けている。例えば次のような文章は明治維新

を徳川幕府の立場からみたものである。近代日本の曙は、明るい未来を約束したのではなく、正当政府がどす黒い血で染められ倒されたとの主張である。⁽¹¹⁾

「明治このかた、日本人一般は、王政維新を高く評価し、それを『史上無比の一大事業』として、礼賛している。……明治以降のご用学者は、維新は、国民の尊皇心から生じたものである、とこじつけ、当時の破壊活動をやった連中をさして、義士だの、功臣だのと、激賞している。はたしてそれが事実であろうか。正論であろうか。……明治以降の日本人は、この破壊活動を扇動した破壊者を、救国の忠臣のように賞められている。」

ともかくその「王政維新」の先頭に立ったのが幕末志士であり、そのイデオロギーは「新論」に代表される、天皇親政の国学がバックにあった。「昭和維新」を唱える昭和の「志士」たちは、未完の明治維新を完成するためと称して結成され、三月事件(未遂)、五一五事件、二二六事件を起こした。いずれも天皇親政を主張していた。

戦後、三島事件のような自衛隊を巻き込むクーデター未遂事件が起きた。

以来、自衛隊内部からのクーデター発言が二、三表面化した。

靖国推進派の論客、大原康男氏ら数名は革命を实行したいと田中清玄に頼み込み、アラブのゲリラ組織で訓練を受けたと、田中清玄自身が証言している。⁽¹²⁾

一五、現代の「志士」たち 戦争の火付け役

靖国推進派に「日本を守る国民会議」なる運動体がある。政界・財界・右翼が加盟して、ひと握りの「志士」の活

動を支えている。その構図は、「幕末の尊王攘夷を唱える志士を支える藩主・公家」と「アジア主義を唱える大陸浪人、昭和維新と唱える右翼主義者・青年将校を支える政府・財界」のように類似している。

「憂国の志士」達は、死を恐れなかった。死んでも「大和魂」は残ると信じていた。いや、ひとたび志士に宿った大和魂は、身を大義のため捧げることによってこそ次の世代の志士に継承できると信じていたようでもある。⁽¹³⁾

幕末の武士と志士の違いは、前者が儒教を儒学という学問体系に閉じこめ、それを理解し、その精神を身につけるまでに至らなかった教養人に留まったのに反し、後者は儒教の精神、どちらかといえば合理的・哲学的精神を信仰体系にまで昇華させ、それに身を任せた信仰者であったと説く人もいる。⁽¹³⁾

志士の道統を今日継ぐものを敢えて挙げるなら、純粹の右翼思想家であろうか。右翼の思想は、死生一如、美しく死ぬ、散華、ロマン主義、農本主義、反近代主義、天皇主義、維新継続論、ナショナリズム、アジア主義のようなキーワードをもっている。もろもろの右翼集団は、これらのうち幾つかの思想に魅了されて結集した集団である。⁽¹⁴⁾

志士も右翼も正規な戦闘集団を手中にしていなが、火付け役としてのゲリラである同志を組織し、謀略でもって戦闘を起こし、正規軍に戦いを託する役をしてきた。

日本の近代史がこのようない握りの集団によって、国家の首脳部が振り回され、その権力行使を余儀なくされてきた。

このような表現は、戦争を実行した国家首脳の責任を免罪することを意味しない。見方によれば、国家首脳が、右翼を操った、抱き込んだとも云えるからである。

キリスト教会側でも、何か社会問題を論ずるとき預言者の働きを叫ぶ。その祖国を思つ心情が幕末の志士、現代の右翼のそれを越えているだろうか。

志士は「狂」となり、妻子を捨て、職と命を賭けて、「日本の正気」を取り戻そうと奔走した。志士はバル神のために戦った。

私たちキリスト者は、主なる神のために戦うべく召し出されている。バルが神か、主が神かの闘争はエリヤの時代から今にいたるまで継続している。

一六、大東亜共栄圏とは

以上、かつての戦争が、アジア解放の戦争であったとの靖国推進派の言論を否定するような靖国推進派の先輩達の言論を主として取り上げた。これだけでも、かつての戦争をアジア解放のためであったとの論が成り立たないことが理解されたことと思う。

日本軍政下での、軍と現地民との麗しい交流の物語はあった。敗戦後、復員を拒み旧占領地に留まり、現地兵に軍事訓練をほどこし、インドネシア独立のため命を捨てた旧日本軍兵士の物語もある。この旧日本兵は、ポツダム宣言に反して日本軍の武器・弾薬を現地軍へ引き渡している。天皇の命令に違反した行為であるが、インドネシア政府からの榮譽を受けている。

しかし、これらの事例を沢山集め、であるが故に日本軍はアジア解放のために戦ったとはいえない。それらは、日本国家の基本政策に反する行為である。日本政府は、侵略政策を解放政策に改めてはいない。

なおこれらの旧日本兵は、天皇の停戦命令に反抗した「反乱」兵士である。戦死したからと靖国神社には合祀さ

れない。靖国推進派が、アジア解放戦争のために尊い命を落とした事例としてこれを持ち出せないはずである。

大東亜共栄圏の秩序は、日本を盟主とした階層構造の頂点とし、第二階層・独立国（中華民国、満州国、タイ）、第三階層・独立保護国（ジャワ、フィリピン、ビルマ）、第四階層・直轄領、階層の外側・圏外国領（仏印、チモール）のようにランクづけされている。⁽¹⁵⁾

大日本帝国は、この秩序を乱すいかなる対抗勢力も、軍事力で制圧する軍政を敷いていたのが真相である。靖国推進派の言うような、各国の自由・平等・独立は、敗戦による日本軍政の重圧が除去された後の出来事である。

終わりに

一九九五年は戦後五十年であることから、各界各層で戦後五十年の総括がなされた。特に、敗戦時に青壮年であった者にとり、人生・個人史との重なりで総括をされている。

中でも盛んであったのは、近代日本の戦争は何であったのかの「総括」であった。マスメディア界の動きは活発であった。重要な企画がなされ、国民に多くの影響を与えた。

キリスト教界でも、過去の戦後二十年、三十年、四十年の総括をはるかに上回る総括がなされた。

筆者は、国家あるいは国民が総括するとは、過去を正しく見つめ、掘り起こすべきことは起こし、歴史観の違いを、歴史的事実に関して客観的で冷静な議論を積み重ね、歴史観の共有部分を広げてゆくこと、誤りは誤りと率直に認め、当然の謝罪と補償を行い、今後の国家・国民のあり方を内外に鮮明することであると、とらえている。

この物差しで、戦後五十年の戦争観を総括すると、歴史観の共有部分の拡大どころか、潜在的に対立していた戦争観が顕在した年であった。「侵略戦争の謝罪」を国会決議するとの公約が果たせなかったこと、多くの地方県議会・市町村議会では返って「アジア解放の戦いで命を失った者への追悼・感謝」決議がなされたことがそれを物語っている。

文部省の教科書検定制度は、多様な価値観、物の見方の育成を妨げる働きをしている。この上に、明治以来に培われてきたアジア人蔑視観が重なり、侵略戦争に対する罪悪観を薄めてしまっているのであるうかがうか。

アジア人蔑視の裏側に、日本人はアジア人の盟主であるとの意識が癒着しているのではないか。

近代日本の思想的指導者達が代々引き継いで持っている対アジア人観が国民の中に教化育成され、その国民の中の対アジア人意識を巧み取り込んだ政府の対アジア政策、この政策の失敗・破綻の結果が敗戦であった。

注

* 本稿は、一九九五年五月、福音主義神学会東部部会の春の研究会において発表したものをまとめたものである。

(1) 歴史・検討委員会編『大東亜戦争の総括』（展転社、一九九五年）

(2) 井上 勲『王政復古 慶応三年十二月九日の政変』（中央公論社、一九九一年）四九二頁

(3) これらは次の著書を参考にしてみた。

鈴木静夫・横山真佳編著『神聖国家日本とアジア 占領下の反日の原像』（勁草書房、一九八四年）

浅田喬二編『帝国 日本とアジア』（吉川弘文館、一九九四年）

後藤乾一著『近代日本と東南アジア 南進の「衝撃」と「遺産」』（岩波書店、一九九五年）

- 萩原宣之、後藤乾一編『東南アジア史のなかの近代日本』(みずす書房、一九九五年)
- 尹 健次『近代日本の異民族支配』、『大東亜共栄圏』構想にいたる民族政策論を中心に』神奈川大学評論叢書第一卷『歴史解読の視座』(お茶の水書房、一九九三年)
- (4) 会沢正志斎著、高須芳次郎詳註『新論講話』(平凡社、一九三四年)
- (5) 歴史・検討委員会編『大東亜戦争の総括』(展転社、一九九五年)
- (6) 戸頃重基『近代日本の宗教とナショナリズム』(富山房、一九六六年)六四、六五頁
- (7) 家永三郎、井上 清他『近代日本の争点(中)』(毎日新聞社、一九六七年)二二三、二二三頁
- (8) 直木孝次郎、中塚 明『近代日本をどう見るか、上』(塙書房、一九六七年)九九、一〇四頁
- (8) 歴史・検討委員会編『大東亜戦争の総括』(展転社、一九九五年)
- (9) 同右
- (10) 鈴木静夫、横山真佳編著『神聖国家日本とアジア 占領下の反日の原像』(勤草書房、一九八四年)
- (11) 蜷川 新『天皇 誰が日本民族の主人であるか』(光文社、一九五二年)一四頁
- (12) 『田中清玄自伝』(文芸春秋社、一九九三年)三四七、三四八頁
- (13) 葦津珍彦著、武士道 戦闘者の精神』(徳間書店、一九六九年)
- (14) 松本健一『思想としての右翼』(第三文明社、一九七六年)
- (15) 海軍省調査課『大東亜共栄圏論』(一九四二年九月)

(日本長老教会府中西原キリスト教会長老)